

# 大阪府立中之島図書館と西村天囚

——文神像と野神像——

Osaka Prefectural Nakanoshima Library and Nishimura Tensyu

—“the statue of Bunshin” and “the statue of Yashin”

呉谷 充利

キーワード 中之島図書館、西村天囚、懷徳堂、今井貫一、大阪人文会

## 二 先達の研究

ともすれば、経済は人間をはなれ、物理的な数字の収支に留まる。が、経済は人間をはなれてしまえばその真の意味を失う。原意の経世済民に返ればそのことがよくわかる。そうした人間と経済をつなぐ研究成果の一端として宮本又次の住友研究がある。仔細にわたるこの一民間研究を遺されたその理由として、宮本又次は『大阪商人』の「序」<sup>(1)</sup>に<sup>(1)</sup>つぎのことを書いている。「人間を忘れ、社会機構のからくりの分析に終始した、あまりにも経済史的な経済史に、ようやく飽きたらぬものを感じ取った私は、今後はさらにこうした研究を続けるであろう。社会構成史的なものの見方や機械論的観念論や決定論的なもの考え方よりも、人間を常に念頭に置かねばなるまい。対立論的な階

級の観点を捨象して」。著者はつづけて「凡そ生きとし生くるもの努力や精進に、そしてその哀歎に人間生活の実相を窺いたいのである」と述べている。その人間生活の実相において、かれは、近世大坂町人あるいは住友に出会った。

歴史は、たどっていくと、政治・経済・社会を構成する、制度という重要な枠組みがある。しかしながら、この制度をもつてのみ、歴史を説明することはできない。人間の生がさらに深く存在しているからである。そこに生きた個々の人間の实相といふべきものである。

野地脩左は日本建築史研究において中世密教伽藍を主題にその建物を建物の内側の言葉だけで説明することから、より広くいわば外側からつまりその建物を取り巻く歴史や社会の言葉において述べている。<sup>(2)</sup>かれは、いわゆる様式史的な建築史ではなく、建築作品を取り巻く歴史的・社会的視点においてその意味を捉えようしたのである。



写真1 開館当時の大阪府立中之島図書館  
(大阪図書館) (大阪府立中之島図書館所蔵資料)

本稿のテーマである中之島図書館についても、図書館の形を単なる建物として説明することから、さらに深くそこに関わった人間の実相とこれを取り巻く歴史的・社会的視点において捉えてみたい。本当の意味で、この図書館の何たるかを我々がくみ取ることができるとは、この見方においてなのである。二先達の研究をここに挙げたゆえんである。

### 中之島図書館の建館

明治三十七年（一九〇四）二月二十五日、中之島図書館が建館され、開館の式典が執り行われる（写真1）。

大阪におけるこの図書館建設の直接のきっかけは、明治三十二年十月二月府知事菊池侃二（きくちかんじ）による「大阪府教育施設計画

書」における図書館設立の議（建築費約五万円）である。この議は、明治三十二年（一八九九）年十一月十日勅令第429号「図書館令」にしたがう地方図書館の設置奨励に拠っている。

このとき、この建館を申し出た人物がいた。住友吉左衛門友純である。図書館建設願につきることが書かれる。「大阪は近年商工業

の發達と市政の尽力に拠って大きな進歩を遂げ、市政二都に譲らず、かえって之を凌駕するものがあるが）、市民の便益を計り子弟の教育を扶くるの方法に關してはなお欠如する所少なからざる様相覚え、ひそかに之を遺憾とし、機会もあらば若干の資を投じてこの種の事業を興し、もつて拙者の祖先以来大阪に負うたる洪恩の万一に酬いたく、平素希望まかりあり候。」（明治三十三年二月十日付 知事宛の住友吉左衛門友純願書 建設費十五万円および図書購入基金五万円 記）

完成を見たこの図書館のホールに「建館寄付記」として掲げられる友純の一文がある。「我が大阪は関西の雄府にして、人口百万、財豊かに物殷んにして、諸学競い興る。而して図書館の設独り焉を闕く。是に於いて、府庁、建館の議有り。某、自から揣らず、図書館一字暨び図書財本若干資を献じ、もつて微力を効さんことを請う。」

### 住友と大坂

住友の歴史を宮本又次『上方の研究』（清文堂 昭和五十二年）に拠りながら、以下に遡ってみる。入江友俊（泉屋理兵衛）は懷徳堂の五井蘭洲の門人として儒学を学んでいる。友俊は病弱の住友五代目兄の友昌に代わって住友の家政一切をまかされる。住友と五井蘭洲のこのつながりは重要な意味をもっている。蘭州の識語「礼を以て儉を処す。儉を以て福を愛す、福を以て人を恵す、恵また福を養う。久しく榮え衰えざるの道、吾聞く、嘉休住友君の御家なり。」が住友の家訓を飾って遺されている（宝歴十一年、一七六二年）。住友の繁栄は、礼を以て儉をなし、その儉を福とし、人に恵することに拠っていると云う。

宮本又次によれば、住友の家訓を示すこの考え方が明治十五年の家法へと引き継がれる。明治二十五年、徳大寺隆磨が請われて先代登久の養子となる。このとき、隆磨を指南したのが住友総理廣瀬宰平である。かれは第十五代家長吉左衛門となって「我が廣瀬君はすでに当家中興の元勳五世の阿衡（宰相）なり。余において之を敬愛すること師父の如し」と祖宗の神霊を拝した誓告文のなかで言う。（『住友春翠』）

### 図書館と友純

図書館の建館にかけた友純の決意には並々ならぬものがあつた。野口孫市が雇い入れられる。この辞令が明治三十三年三月十四日付で出されている。つづく明治三十三年六月一日住友本店臨時建築部が設営される。住友記録文書によれば「六月一日本店直轄、重要ナル新築工事ヲ管掌スル為臨時建築部ヲ置カル」。さらに友純は、図書館の敷地について「ともかく今日の所にては、予定の場所よりも公園内にては優等の場所と存じ候間、一寸申し入れ置き候。過日当地にて知事に面会の節も図書館のことならびに位置のことなど一寸出で候間、小生希望の場所大略申し述べおき候。」（本店支配人植村俊平宛書簡明治三十三年二月十二日『住友春翠』による。）と書き、自身のこだわりを述べている。

### 図書館の造形

中之島図書館を特徴づけるものにドーム型ホールがある。設計したのは野口孫市である。ドームの起源をたどると、ローマのパンテオン



写真2 大阪府立中之島図書館ホール（筆者撮影）

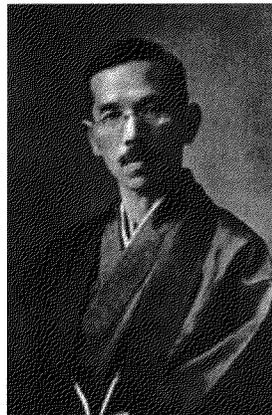


写真3 野口孫市（大阪府立中之島図書館所蔵資料）

ような半球形の部分をもたない機能的な形の長方形である。こうしたことを考えてみると、野口孫市がみずから受け止めたある精神性の表現としてそのドームの設計があつたといえよう。遺された写真は、野口孫市の誠実さを伝えている（写真3）。その図書館の設計に込めたものに住友が継承する近世大坂の文化があつた。

ドームは図書館からすれば、単なるホールである。具体的、明確な機能はない。がそのホールには、本に触れるよろこび、その期待感、あるいは学ぶことの矜持、そういう気持ちの昂まりが空間的臨場感としてみごとに表現されている。この時代、図書館はほとんどなかったのである。

近辺の例を挙げれば、ほぼ同時期の明治四十二年に京都の岡崎に造

る。神聖な内部、ドームの美しさが映える（写真2）。その天井にはステンドグラスが嵌められている。が、他の図書館は、ほとんどこの

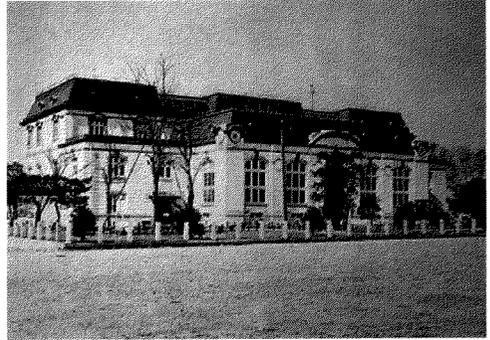


写真4 京都府立図書館（武田五一 京都岡崎  
明治四十二年）

られる京都府立図書館がある。そこにドームのホールはなく、閲覧室が構成的に重視され、正面をつくっている（写真4）。

また近年の一例で、関西大学の図書館（昭和六十年開館）がある。これは故鬼頭梓氏の設計で、「図書館というものはスーパーマーケットだ、どこに何があるかわかることが一番大事な

のだ」という、スーパーマーケット式思想でつくられている。が、こうした機能的進歩によってもとにあった精神性が次第になくなって、そのかたちが非常に便宜的で殺風景な味気ないものになることがよくある。

図書館においていえば、本との出会い、その気持の昂まりこそが、重要である。中之島図書館のホールはこれに共鳴する精神世界を表現している。球形は何を現わしているか。そのかたちは象徴的に宇宙とか世界を現わしているといえる。夜空を見ると球形である。昼間の青空も球形である。そのホールは、「宇宙に立っている、宇宙の中の自分、人間とは一体何であるか」ということを何となく感じさせる。

野口は西洋建築の基本を辰野金吾に学んだあと、住友から洋行費を支給され、明治三十二年二月から翌三十三年三月まで欧米に遊学している。この欧米視察のあと、野口は臨時建築部の技師長の職に就く。

技師は日高胖である。図書館建設の一步がはじまる。

### 図書館の増築と文神像、野神像の設置

明治三十七年に竣工した図書館が増築される。住友の再度の出資を受け、大正九年末から大正十一年十月にかけて図書館の両翼と書庫が拡張される。野口孫市はすでに他界しており、あとを継ぐ日高胖によって増築部分が設計される。この二期工事のとき、ホール正面の階段壁龕（ニッチ）に二つの銅像が置かれる。文神像と野神像である。作者は北村西望とされ、大正十一年末から大正十二年初めにかけてつくられている。

しかしながら、この一對の彫刻である文神像、野神像（写真5、6）について、その来歴はじつは明かされてはおらず、誰がどういう考え方でつくったのか、これを明瞭にする資料はほとんど残されてはいない。二体の像は、本当の意味を秘す、さながら「封印の手紙」のようにさえ見えるのである。

作者は確かに北村西望で、制作年もほぼ判明しているが、北村西望に住友から発注したという記録は見あたらない。「東京美術学校を介して彫刻……」という文面は遺されているが、直接的に北村西望に依頼したということは出てこない。北村西望は当時大阪人ではなく東京人である。制作のために中之島図書館に来たという記録も見当たらない。そのようなことから推測すれば、北村西望が彫刻のテーマからその制作まですべてを決めたとはできない。つまり、一体どのような彫刻の経緯がつけられたのか、そもそも不明なのである。

この彫刻の経緯を改めてたどってみると、実際の彫刻についてはた



写真6 野神像  
(同図書館所蔵資料)



写真5 文神像  
(大阪府立中之島図書館所蔵資料)

しかに北村西望が制作したと思われるのであるが、「文神、野神」という考え方そのものは、じつは大阪から、つまり図書館の側から発せられたと考えられる。中之島図書館ができたのは明治三十七年である。大正末の二期工事に伴って、正面玄関にある二つのニッチに文神像、野神像が鎮座される。が、ニッチそのものは当初から存在している。そこに何も置かれなまま、大正十一年を迎えるのである(写真7)。

したがって、住友の側が彫刻像も含めて寄贈したということであれば、すでに彫刻像がつけられているはずである。住友の財力からすれば、これが困難であったとは思われない。こうしたことから推察すれ

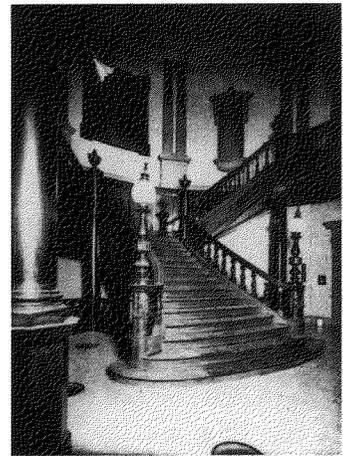


写真7 大阪図書館ホールの空洞ニッチ(大阪府立中之島図書館所蔵資料)

二期工事を迎えている。

彫刻の制作費は極端に高額なものになったとは思われない。したがって、図書館においてもその制作が困難であったとはいえない。結論づければ、なぜ彫刻像が不在のまま、大正末までそれがつづいたかという、「考え」がなかったからだと思われる。

「考え」として、たとえば、プラトンなり、アリストテレスなり、他のギリシャ彫刻なりあるいは東洋の賢人なりが思い浮かぶ。が重要なことは「まさにその彫刻でなければならぬ」という意味での考えかたである。住友友純もそこまで具体的な関知はしなかった。二期工事のとき、野口孫市もすでに他界している。今井館長でさえもこれにたいする明確な考えを表明してはいない。

ではこれを考えたのはいったい誰か。このヒントを与えてくれた資料が、図書館に残された「父貫一を偲ぶ」という、原稿用紙に書かれた一記録である(写真8)。

ば、住友の側は、彫刻像については図書館側に任せたと考えられる。ところが、当の今井貫一館長もその後それには手をつけずに大正末の

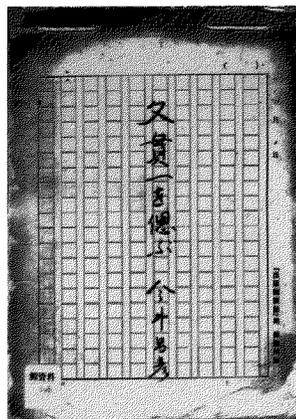


写真8 「父貫一を偲ぶ」  
(大阪府立中之島図書館所蔵資料)

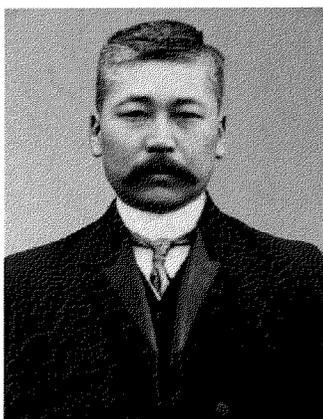


写真9 今井貫一  
(大阪府立中之島図書館所蔵資料)

### 近世の学（懷徳堂）の復権と大阪図書館

明治四十二年、大阪図書館記念室において今井貫一（写真9）が大阪人文会をひらく。九月四日の相談会には西村天因、渡辺霞亭、磯野秋渚、水落露石、角田浩々、木崎好尚、今井貫一、浜和助、他十九名が集まっている。（『中之島百年——大阪府立図書館のあゆみ』平成十六年による。）開館五年目に開かれたこの会は、大きな意味をもつ。近

代の大阪が人文という近世以来のテーマを再考するからである。翌明治四十三年、中之島図書館記念室での例会において西村天因が懷徳堂五井蘭洲の儒学について講演する。このとき西村天因はつぎのことを述べている。

「今人、よく商業上の公德を重んずべきを説く、商業上の公德とは何ぞ、また人道の商業上に行なわれるなり、偽らず、欺かず、これ至誠にして、人道の本たり、人道の本は信用の生ずる所、すなわちこれ商業上無形の資本にあらずや、物質上の資本は算盤量衡の目に現するも無形の資本たる公德すなわち信用は、唯心の上にあるのみ。心を治め身を修め、以て事業に施すは儒学の根本なり。」（西村時彦『懷徳堂考』抜粋明治四十四年）

この講演に触発されて、懷徳堂公祭の議が起こり、明治四十三年九月二十五日「懷徳堂記念会」が創設される。住友吉左衛門友純は会頭に推薦され、これを「快諾」している。翌明治四十四年、中井家から懷徳堂遺書、水哉館遺書が中之島図書館に寄託されて「懷徳堂記念室」が設営され、名実ともに中之島図書館は近世大坂の学（懷徳堂）復権の母胎となる。このあと西村天因は懷徳堂の再建を主唱し、大正五年「重建懷徳堂」の建設を見る。理事長は永田仁助である。

年譜（『中之島百年——大阪府立図書館のあゆみ』平成十六年）によれば、大正六年、手狭になった図書館の増築にたいして住友家から寄附の申し出が出される。が、物価高騰のため、時機を窺う。（同）大正九年 両翼拡張増築工事が着手され、住友當舖課の日高胖ゆたかがこれを担当する。

大正十年、西村天因は宮内省御用係（「私手当年五百円ハ光荣」十一月四日「牧野伸顕宛書簡」となるが、大正十三年に他界する。

## 今井貫一と西村天囚

今井貫一の追悼文が遺される。「私は碩園先生（西村天囚）に交を辱<sup>かたじけ</sup>うすること二十年余、この間公私大小の事に当り、博士の人格の発露に感激したことは甚だ多く、今追懐記の筆をとると、彼此のことが交々脳裏に浮んで来て一寸簡単に書き尽くしがたい。」（今井貫一「碩園先生と図書館」）

今井昌彦「父貫一を偲ぶ」（上記）にこう書かれる。「天囚博士は旧知、かねてその学の深きを敬いおりし所、懷徳堂重建を中心にこの三人（西村天囚、永田仁助、今井貫一）の交りはこの日（明治四十五年三月十日）かたく結ばれしならん。その後この二畏友に対する父の敬愛ぶりは我々家族の永く忘れ得ざる所にて、博士先ず逝去、ついで翁のその後を追うや父の悲嘆は我々家族の見るに忍びざる所なりき。」

建館以来、図書館の運営における重要な役割を西村天囚が果たしていることがわかる。天囚は近世大坂の学を近代に継承、再興した人物として特筆される。以下、三人の生没年を挙げておく。

\* 今井貫一（明治三年一八七〇）昭和十五年一九四〇「中之島図書館館長在位・明治三十六年一九〇三）昭和八年一九三三）

\* 西村天囚（慶応元年一八六五）大正十三年一九二四）

\* 永田仁助（文久三年一八六三）昭和二年一九二七）

## 文神像・野神像の発案者、西村天囚

今井貫一が呢懇につき合う二人の人物として西村天囚（写真10）と

永田仁助がいた。

この二人に対する今井貫一の思いがいかに深いものであったか、今井昌彦はこのことを「父貫一を偲ぶ」（上記）に記している。

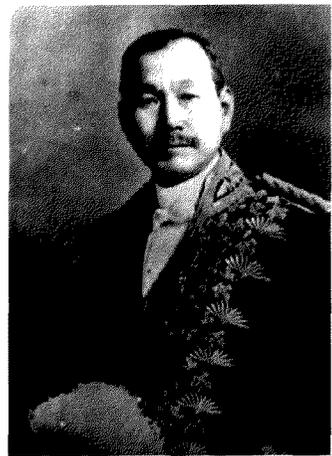


写真10 西村天囚（所蔵者不詳）

西村天囚は、大正十三年に他界している。図書館に一对の彫刻像がつくられて僅か一年を数える頃に逝去したのである。彫刻の記録が残らなかった一つの理由がそこにあつたと考えられる。つまり、二体の彫刻の設置に大きな役割を果たした人物が不幸にも他界したため、そのことにたいする肝心の記録が残らなかつた。こう推察してみることができるのである。「銅板を真ん中に、左右に文明神像、野蛮神像」と書く絵はがき（大正十二年）がある。「野蛮神像」というその言葉がなぜそこに出たのか。これは、発案者の不在のまま他者が思いつくままに付けたものである。西村天囚は大正十年（一九二一年）、宮内省御用掛となつて上京し、このときすでに東京に出ている。

結論づければ「文神像、野神像」という彫刻のテーマを決定したのは西村天囚、その人以外に考えられないのである。文神、野神というその名にどういふ思いが込められたのか。彼の考え方をたどつていくと、文神、野神というその彫刻の思想にまさしくつながつてゆく。

西村天囚の考え方を推察すれば、「野神」は「野蛮」ということではなくなる。文神像、野神像の「野」というのは、たしかに野原、野

蜜という意味をもつ。が「野」は、さらに、もう一つの「民」という意味がある。つまり、より正確にいえば、野神像は「野蜜さ」の表現ではなく「民の表現」なのである。その民が本を読む。文神、野神は対立的な二つの文明の意味を現わしているのではなく、同じ人物の二つの姿と見るのが、じつは文神像、野神像が表現する本統の意味である。こう考えてみると、辻褃がびたりと合う。

西村天因が他界した時、今井貫一は追憶記を書いている。今井貫一と西村天因の関係が、今井貫一自身の言葉としてあらわされている。二人の交友は、明治三十六年に今井貫一が初代館長としてその職に就いた時にはじまっている。それを機会、機縁にして、西村天因と今井貫一が交友を重ねてゆく。西村天因の追悼文の中で、今井貫一はつぎのことを述べている。

「私は、碩園先生（西村天因）に交を辱（かたじけの）うする」と二〇余年、この間公私大小の事に当たり、博士の人格の発露に感激したことは甚だ多く、今追懐記の筆をとると彼此のことが交々脳裏に浮かんで来て、一寸簡単に書き尽くしがたい。（今井貫一「碩園先生と図書館」）

この「公私大小」の中に「どういう彫刻がいいでしょうか」ということがあったと推察される。大正末の中之島図書館第二期工事において、今井館長はこの総責任者である。彫刻の決定について、他に助言を求めたことは確かであろう。

が、今井貫一は、明治三十七年以來大正末まで、ニッチの彫刻制作を具体化しなかった。このことからすれば、その決定については、今井貫一の周辺の交友関係に重要なヒントがあると考えられる。親しく深い考えなりあるいは人間的なことも含めたその昵懇の間柄である。

この交友関係を上記の記録は書いている。つまり、この関与が推察される人物は、永田仁助と西村天因に絞られるのである。

そのなかで、永田仁助は再建された重建懐徳堂理事長の要職に就く。が、近世大坂についての学識からすれば、「大阪図書館」を飾る彫像というそのテーマについて西村天因が重要な役割を担ったことは明らかであろう。つまり、西村天因こそが、「文神、野神」ということでなければならぬ」というその「考え」の発案者であったと考えられるのである。

このことからすれば、ホールにみる「文神像」「野神像」は北村西望作とはなっているものの、じつのところとしては、括弧あるいは裏側に「題名…西村天因」と付するのをもっとも望ましい表記になると思われる。

### 文神像、野神像の本統の意味

文神、野神、その二神において、西村天因は何を現わしたかったのか。天因は、近世大坂がいかに高い文化を持っていたか、いかにすぐれた学問の世界がそこにあったかということを、いち早く明治の社会にメッセージとして送っている。そのなかで、とりわけ懐徳堂を再評価し、自著「懐徳堂考」を遺している。

大正五年重建懐徳堂がつくられたとき、みずから述べた講演録において、天因はつぎのことを強調している。この所に「大阪において初めてできたところの、大阪人共有の公立学校でございます」と語って、西村天因は「これが私どもが重きを置くところでございます。単に中井莞庵や五人の大町人が寺小屋を開いたというなればさほど思

ませぬが、大坂三郷の人々が町人教育のために建てたところの公立学校というのが、性質の重いと存じます」と述べる。つまり、懷徳堂という大坂の学問所は、あくまでも大坂人共有の学校であるところが重要なのだとかれは言う。懷徳堂の公共性である。因に、現在、淀屋橋から南に歩いた日本生命ビルの壁に懷徳堂旧趾碑が建っている。

懷徳堂がどういうものであったか。壁書は簡単にいえばつぎのことを書いている。「学問は家業を大切にす」。後から来た者は武士といえども末席。「書物を持たざる者も来てよい」。「仕事の都合で中座してもよい」。このことについて、西村天因は「土地の事情を斟酌した立派なやり方で世間に類のなきこと」であると述べている。(西村天因「懷徳堂の由来と将来」大正四年十月十五日「重建懷徳堂開堂式講演より抜粋」)

「文」は「本を読む」であることは明白であるが、これにたいする「野」の意味がここにびたりと現わされている。「野」が意味する民の世界である。業を営む者が学ぶその民の世界である。西村天因の考え方をたどっていくと、このところで、まさに文神、野神の「考え」の発想に行き着く。文神、野神は西村天因のこの考えかたに的中するものである。

資料の検討からいえば、二神像は個人的にその全体像が北村西望に託されたとはいえず、一彫刻家の芸術性という以上に、中之島図書館における空間的な役割(図像性)、その主題生がより求められたと考えることができる。

## 大阪の町人文化としての商いと学、

「はたらきつつ、まなぶ」こと

懷徳堂の壁書にある学の意味は簡単にいえば「はたらきつつ、まなぶ」ことである。この「はたらきつつ、まなぶ」ということは、いわゆる苦学生の勉強を言っているのではない。「はたらきつつ、まなぶ」の意味は、人間が生きることと学ぶこと、これは分離しているのではなく一つなのだということである。

つまり、この「はたらきつつ、まなぶ」というのは、人間として学ぶ、人間として学問をする、ということに尽きる。そうすると、人間として学問をするとは何であるかという、そのことに社会というものが出てくる。人間として学ぶということは、自分は一切何のために生きているのか、社会に対して何であるか、生きるとは何であるか、そういう問いにつながる。その精神において、まさに儒学を継承し独自に発展させた近世大坂町人の学の意味がある。町人文化が生み出す倫理としての生である。

ところが、列強のアジア進出と植民地支配の脅威をまえにして、明治政府は富国強兵と殖産興業を焦眉の課題とする。脱亜入欧をもってする西洋文明の導入は、儒学からの脱却を意味した。学問の意味も大きく変化する。近世における学問の人間の意味ではなく、学問の応用的な技術が重視される。誤解を恐れずにいえば、そこでの学問は人間から離れてしまう。

約すれば、人間の内と外の乖離ともいえるべき不安定な心性が日本の近代を覆う。

明治を生きた森鷗外や夏目漱石、あるいは永井荷風、これらの文豪の境地、心の世界はこれを吐露している。自分は生まれてから一体何をしていたのか、やっていることは舞台に出ている役者にしかすぎない、赤や白をつけた役者にしかすぎない、本当の自分は舞台からおりた所にあるのではないか、森鷗外は『妄想』の中でこう綴る。舞台の上の森鷗外は「軍医総監の森鷗外」、あるいは「ドイツ留学した森鷗外」である。が、それは自分にとって何であるかというところ、そこには真の自分はない、現われないと述べる。透けて見えるものは自身の寂寥である。

夏目漱石もまた「外発」の近代を語る。日本の学問は外からいわば強制的に学ばされている、本当の意味で内側から生まれてくる、内発としての学問は明治にないという。永井荷風も同様に近代における日本の文化の衰退とその悲憤を表す。

明治における性急な西洋文明の導入とこれに拠る不安定な内面世界の不毛さが見える。とすれば、その明治にしづかに復権する近世大坂文化の意味は軽いものではない。懷徳堂の「はたらきつつ、まなぶ」の意味は、働かざるを得なくて、働きつつ勉強するというようなことをはるかに越えたもつと深い人間的な意味であり、その基盤に立つ学問の世界に届いている。

その近世の文化を伝えて、わかる形で現わし、それを見事な建築作品とした、そのモニュメントこそが、中之島図書館なのである。つまり、その図書館は近代に伝えられた近世大坂のたぐいまれな遺産であり、近世大坂の精神の核につながる建築表現、大阪の至宝そのものである。その学の精神に例えば山片蟠桃の無鬼論がある。この無鬼論に東洋的科学的精神の萌芽を見ることは間違いない。近世大坂

文化がもつ意味の大きさが改めてわかる。

近世大坂の学の精神は住友友純や西村天因を介して復権し、明治に受け継がれる。中之島図書館の建設はじつにこのことを意味している。中之島図書館、それは、大阪町人文化の精神の核、魂ということと同時にあるいはそれ以上に今日の我々にとって、「人間がいかに生きるか」あるいは「社会と自分」、「企業と社会」ということに対する一つのメッセージを永遠に与え続けてくれるモニュメントなのである。

文神、野神の二つの像はまさにこのことを伝えようとする。一言でいえば、学問における人間の存在である。言い足せば、蟠桃の無鬼論もそこに遡る。

#### 注

(1) 宮本又次は『大阪商人』講談社学術文庫 二〇一〇年

(2) 野地脩左「中世密教伽藍、天台宗比叡山延暦寺の最澄から浄土教、俊乗坊重源「浄土寺浄土堂」にわたる研究がある。

#### 〔付記〕

\*本稿は、筆者が大阪市中央公会堂で「中之島図書館、新たな百年の一步」と題しておこなった講演録を修正、加筆したものである。(講演二〇一三年三月三日「明日の中之島図書館を考える会」主催)

\*現大阪府立中之島図書館の当時の名称は「大阪図書館」である。